

第五節 西南の役と長崎病院

明治七年二月四日、征韓論を中心として廟議と相入れない江藤新平の一派は佐賀を根拠地として政府に叛旗を翻していたので、政府はこの討伐の軍を起した。その後も新政府の政策に不満な人々は各地に反乱を起し、秋月や萩などの反乱軍の鎮定は局部的に解決されたが、これらの人々の中には急進的な人もあり、又、明治九年十月二十六日に起された熊本の神風連のように非近代的思想を奉じて憚らない人もいた。ところが、明治十年（一八七七年）一月三十一日、鹿児島に叛旗を翻した西郷隆盛の率いる一派の反乱軍は上記反乱に比して甚だしく大規模なもので、政權を掌握すべく、二月二日より鹿児島を中心とする私学の人々が集団的の反逆行動を始め、二月十五日以後、熊本城を攻撃して熊本鎮台を孤立せしめるに至ったのであるが、政府は西郷隆盛の率いる反乱軍が起されて間もなく征討軍を組織し、ここに維新後の最後の

内乱が起ったのである。この二月一日、西南の役の起きるころに平和な長崎病院では薬局係、治療係、薬剤係の異動があった。即ち長崎病院薬局係長屋恭平は長崎病院治療係副兼薬剤係を、治療係田口秋桂は五島病院在勤を、阿部権は薬剤係副を申付けられ、西原良助は長崎病院薬剤係副に任ぜられて、更に五島病院在勤を申付けられている。

処で、鹿児島反乱軍に対する征討軍団が組織された後、二月十四日、小倉分営部一中隊が長崎に来港し、更に警視庁警官隊も来崎した。一方、緒方維準は二月二十八日に至り、征討軍団附を命ぜられ、軍団軍医部長陸軍軍医監林紀の支配に入り、軍医学校卒業生を率いて直ちに福岡に出張した。三月二日には、緒方維準は久留米に転じ、同月六日には征討軍団病院副院長を命ぜられたのである。そして十日に陸軍本病院出仕の兼任を命ぜられ、

第五節 西南の役と長崎病院

軍医部長兼軍団病院長林紀が多くは野戦に出て、久留米にいないので、緒方維準は専ら院長代理を勤めていた。

さて、長崎には、陸軍少将山田顕義の率いる征討軍の傷病兵が三月に輸送され、遂に明治七年の征台の役の場合と同様、長崎医学教育は危機に陥った。然しこの時は幸い、長崎病院長兼医学場長吉田健康が鋭意長崎医学の復興に努力していた矢先でもあり、その復興の途次にある長崎病院医学場は政治的悪条件を克服して遂にその災を免がれた。政治的問題はしばしば医学教育を危機に陥らしめるものであるが、病院本来の使命が、多くの傷病者を診療するにあるため、種々の制約はあっても、医師の本分を尽す場所としての医療施設は広く一般に開放されるべきところであり、時代の要請に従って、可能な限りの努力と慈恵を吝むべきではないのである。このような状態で、居留外国人の治療も行っていた長崎病院がその役割を変更せねばならなかったので、三月十五日、大浦外国人居留地に海軍仮病院が設置されたのであるが、吉田健康は三月二十三日、山田陸軍少将の辞令を得て陸

軍御用備に任ぜられ、長崎病院は傷病兵の收容所となるに至り、警視病院の本院に当てられることとなった。然し長崎病院医学場では、なお、医学の講義が続けられ、長崎県では翌二十四日、国富僊太郎を医学場長代理（吉田健康が陸軍御備である間）に任じたのである。

三月二十六日、臨時海軍事務局が神戸から長崎に移されたが、この月、長崎運輸局も大村町に設置された。

この西南の役における長崎病院の役割は官軍、後に警視局員の傷病者を收容し、治療するにあつたが、三月二十五日、長崎県衛生係は県令北島秀朝に伺を提出し、吉田健康の他五名の医師たちの出征後の補充として、吉雄主斎、鹿児島寿菴、二宮良逸の三名の医師を雇入れるように願出ている。

官軍手負之者長崎病院ニ於テ治療候処過日来院長外五名出征陸軍へ随行候ニ付テハ人少多端ニ付不取敢左之三名雇入補助致候就テハ当分之内案文之通御雇入相成度 尤給金等ハ一時本院費之内ヨリ諸費一同立替致追テ其筋ヨリ償却方相伺可申此段相伺候也

吉 雄 主 斎

鹿兒島壽菴
二宮良逸

長崎病院雇申付月給三拾円給与候事

明治十年三月廿五日

長崎県

追テ看護長三名御雇入相成度尤人撰中ニ付先案文ノミ右ニ相
伺候也

長崎病院看護長申付月給六円五十銭給与候事

年月日

県名

これに引続いて、紺屋町中村清胤、十善寺小島郷加藤
文敬、西中町竹下林馨が看護長に雇入れられた。三月二
十六日のことである。そして同月二十九日、第一分派長
崎病院が大音寺に置かれた。

四月五日、吉田健康は別働隊第二旅団によりその旅団
附を免ぜられ、征討別働隊第三旅団本陣よりその旅団附
を命ぜられ、長崎病院出張を仰付けられた。

長崎病院は単に本病院とも称せられていたが、広運館、
正覚寺、大音寺の他にもバラックを以て作った分派病院
の援助も行わねばならなかった。

本病院看護夫 池下仙之介
同 上田末蔵

第一大区船津町 近藤吉平 四十八才

同区 本大工町 中尾巳之吉 四十五才

同区 船津町 古川五平 三十五才

同区 今魚町 園田善太郎 三十五才

同区 東古川町 松浦喜平 三十四才

同区同町 寄留 本田初太郎 三十四才

同区同町 寄留 和泉甚右衛門 四十八才

同区 勝山町 田中清平 五十才

同区 紺屋町 杉山清八 五十一才

同区東古川町寄留 小川熊之助 三十才

同区 西中町 松尾源次郎 三十五才

第五節 西南の役と長崎病院

同区 岩原郷	藤野弥五郎	四十六才
同区 同郷	平田幸平	四十六才
同区 同郷	平田龜吉	廿五才
同区 小川町	古賀茂作	五十才
同区 同町	広瀬龜太郎	五十五才
同区 興善町	土井長吉	五十才
同区 恵美酒町	佐藤長十郎	二十五才
同区 内中町	平田寅吉	四十六才
同区 本興善町	米原嘉市	三十九才
同区 本博多町	加藤熊次郎	廿一才
同区 出来大工町	中村又三郎	廿三才
同区 紺屋町	天野久次郎	廿九才

同区 酒屋町	池田久平	四十才
同区 紺屋町	江間雅四郎	廿五才
同区 本大工町	高嶋和平	五十四才
同区 本興善町	東藤吉	廿一才
同区 同町	山口重三郎	三十九才
同区 桶屋町	大町正太郎	四十五才

三拾宅名
 藥局小使 大久保 善四郎

右之通本月五日看病夫并ニ藥局小使都合三拾貳名之人名致御廻し候也

明治十年四月六日 本院 俗務係(石田)
 第一分派病院
 會計係 御中

こうして本病院たる長崎病院は分派病院に対して看病人や藥局小使を廻し、援助していたのである。

四月十五日、軍団病院會計部は海軍病院・警視病院詰
医官に宛てて、葡萄酒及び煙草を進呈する旨を通達した。
当時、海軍病院には患者は四百四十名、警視病院には百
三十九名が入院していた。他の見舞品については、四月
十八日、吉田健康が第一分派病院に宛てた文書がある。

記

一 葡萄酒

沓箱

含マテ可然御取計と有度此段申進候也

四月十八日

吉田健康(吉田)

第一分派病院 御中

又、四月二十日、長崎病院宛てに第一分派病院の医官
の申込みにより、患者用の杖を届けた。

本日医官ヨリ沙汰ニ付患者用之杖式拾本御廻し候間御落手可
被下候也

四月廿一日

本病院

第一分派病院

庶務係 御中

一方、五月三日には、種痘取締医として、前年四月十
二日に制定された種痘医規則に基き、矢野一が申付けら

れ、月給七円が支給されていて、長崎病院は完全な軍事
病院としてのみの事務を取扱っていたものでなかったこ
とが視られる。次に、長崎病院医学場生徒の西南の役に
対する勤労働員の手当に關した文書を示そう。(明治十
年從四月至七月編纂、分派病院庶務係書類、非常事務係)
医学場生徒賄料一日金七錢四厘与確定ニ有之候此段及御廻答
候也

五月五日

医学場

俗務掛(印)

分派病院庶務係 御中

五月九日、吉田健康は征討總督本營より陸軍々医に任
ぜられたが、引続き長崎病院に勤務した。

五月十日、吉田健康は第一分派病院庶務係と交渉すべ
き用件を生じ、俗務係を経てその旨の書簡を第一分派病
院庶務係に発し、分派病院より直ちに来院した。用件は
西洋手掛一人前を分派病院より送付して貰うにあった。

次いで、長崎病院は上野屋駐在の石沢警部の依頼により、
九日・十日の退院患者数を調査し、本院は十六名と判り、
第一・第二分派病院の分を調査した。本病院は翌十一日、

第五節 西南の役と長崎病院

第一分派病院に対し、第一・第二分派病院の患者百七人分の西洋手掛二個宛（一人について二個）、二百十四個のうち二個（前日夕刻上野屋に届済）を除いて送るので、第二分派病院にも分配するよう依頼した。この西洋手掛は長崎税関官員が傷病兵に対して寄贈するもので、長崎病院に十一日に送付する旨を伝えていたのである。

五月十四日、吉田健康は征討総督本営より征討軍団病院附を仰付けられた。同月二十五日に調査した長崎病院俗務係の非常用品の購入数が判っているので（長崎病院が三月二十五日より二ヶ月間の分を調査したもの）、それを「明治十年二月以降、病院必需物品渡簿、非常事務係」によって示そう。

記

一 臥台	百 個
一 藁枕 但上袋共	三百 個
一 同蒲団	百 枚
一 飯台	貳拾脚
一 毛布	百五拾枚
一 掛フンブ	拾三 個
一 置ランブ	壹 個

一 スボイト	大小	拾九本
一 竹柄杓		六 本
一 棕櫚簾		七 本
一 竹簾		七 本
一 コロモンセン		貳 本
一 土焼丸火鉢		三拾個
一 ブレッキ手水鹽		八拾個
一 土焼受鉢		五拾個
一 茶碗	大	四拾個
一 焼物ザシ		四拾本
一 煙艸盆 但附屬品共		四拾五個
一 具足アキ		壹 個
一 ブレッキ足形箱		四 個
一 木製手形并フクボク		百拾六枚
一 茶出し		拾壹 個
一 水田子		壹荷半
一 病衣廿枚分派ヨリ（この行朱）		
右ハ本年三月廿五日以来非常用ニ付買入之諸品備		
右之通ニ御座候也		

長崎病院

明治十年五月廿五日

俗務係（石田）

非常事務係 御中

証
蚊帳 七十張
内

五六 四十六
六七 二十四

右正ニ請取候也

長崎病院俗務係

十年丑五月廿四日

加幡豊次郎（加幡）

この他、第一分派病院の請取証その他、各分派病院の備品表等もあるが、省略する。なお、六月二十六日、吉田健康は第一分派病院へ毛布四十五枚を廻している。

五月三十日、吉田健康は三通の伺書を北島県令に呈出した。（二の分のみ原文のままとする。）

一、先般来非常ニテ当院へ警視隊被傷者多人数入院候ニ付臨時御雇入相成候吉雄主斎以下五名之者未タ戦争平定御解雇可相成期モ難計候就而者元ヨリ方今非常之際故可及的勉勵各々義務ヲ尽スベキハ無論ニ候得共銘々從來之家業ヲ抛チ勉務仕候義ニ付斯ク遷延仕候上ハ多少之困情モ可有之ト愚考仕候条差当リ御手当トシテ其ニ増給之御銓議相成度尚御参考之為メ相当増給高左ニ奉伺候也

第四章 長崎医学の復興

これによって、治療係の吉雄主斎は十五円、鹿児島寿庵、二宮良逸は十円、看護長の加藤文敬、中村清胤、竹下林馨には一円五十銭が増給されることとなった。

二、治療係田口秋桂、治療係兼助教国富仙太郎、薬局係大浦従吾の三名は治療係兼助教引間泰介以下四名が戦地へ出張し、院務多忙の際勉務したが、引間も帰る時期が期し難いので増給して頂きたい。

これに関する増給は一時雇の者とは違うという理由で見合せとなった。然し、三名ともに、六月に入って、増給（田口、国富は月五円、大浦は月二円）されたし、吉雄（十五円）、鹿児島、二宮（共に十円）、加藤、中村、竹下（共に一円五十銭）も同時に増給支払が実現した。

三、器械書籍係リ大塚長吉を厳原分派病院へ派出したので、残務は治療係で担当していたが、新調の器械書籍も多く被傷者も多人数入院し、当分派病院も設立之際何分届き兼ねた、それで生徒取締大賀禄郎は治療方も心得ているし、院内に詰切りであるから同人へ兼任仰付けられたならば至極適任だと思っている。それで、月給二百円増給した上、同人へ兼務を仰付けられ、随って生徒取締勤川端経徳へ二円増加の上、本役を仰付けられたならば、医学場生徒の取

第五節 西南の役と長崎病院

締向でも不都合がないであらう。至急御詮議相成りたい。

これによって、関係者は共に増給が確定している。

五月三十日、県衛生課非常事務係は北島県令に宛てて伺書を提出した。その大意は長崎病院において警視負傷患者を引受け、治療を行っていたところ、患者が案外大勢で、医員が少く実際行届き兼ねている訳で、追々伺の上、医学生徒(各区費生)の内、最先進輩を抜擢して薬局掛、看護医助勤を申付け、ために院務の都合を得、今日に至ったが、右は元来、生徒であるから、給料を賜わること如何と多少懸念の廉もあり、先ず挙げて無給でやって来た。然し、日夜、医員に倍し、院内で周旋していることに付いては依然舎内に在って、勤学しているものとは向う体面上に關する廉もある。全く無給では聊か難渋し、情実もある由である。そうは云っても追々習熟に歸し、独り本人のためだけでなく、院のため退いては区のためになるべき見込があるのを認め乍ら、之を免し、他の町医に譲るようでは生徒の教育上、頗る遺憾の次第でもある。且つ又、目下の景況では当分必定入用の者であるべ

きである。就いては、給料としないで、手当として一ヶ月金七円ずつを御支給にされるべき方が妥当であるかに見込まれるからその通り御聞済み下され度い。尤も金員は外一般警視の軍費より仕払相当の筋と思われる。依つて、左に御辭令の按を付し、御暇を伺うというのである。そして七円の手当の按を出しているが、五円に訂正して決定している。そして区費生奉職日限が示されている。表示すれば、次の通りである。

薬局掛に川島政徳、佐藤一郎、末岡小金吾、岸川万太郎（以上四月五日拝命）、小佐々立栄（四月三十日拝命）、橋崎元一（五月二十三日拝命）、護長助勤に山口要策、戸次清二、赤木末四郎（以上四月五日）、大曲武八郎（四月十一日拝命）、洪江俊民（四月二十一日拝命）、市川菊齋（五月十四日拝命）、阪本元泰、加瀬道益（五月二十三日拝命）、護長助教に岩野全治（四月五日拝命）、取締助勤に末松次郎（四月二十九日拝命）と云うのである。なお、末松次郎は四月十九日に医学場生徒取締心得を拝命している。

長崎病院は院内取締について、六月九日に、分派病院へ達するところがあった。

当入院患者ニ付室内等へ諸商人入込売買致候義御聞合ニ相成於本院ニテハ病室へ飴菓子売捌へ旧来より禁故門内エハ入込不申候得共此節ニ而者貸本屋并ニ反物屋丈室内へ差許置候処尚以本日ヨリ相改貸本屋反物屋丈へ庶務係詰所ニテ引合致させ候様相定置候間此段及御報知ニ候也

本院

十年六月九日

俗務係(石田)

第一分派病院

庶務係 御中

翌十日、正覚寺の第二分派病院に、入院患者用の毛布(大判)五十枚を長崎病院より送付し、長崎病院俗務係は院長吉田健康にその旨を報告した。長崎は挙げて傷病者の治療に当たっていたとも云えよう。

六月十一日、吉田健康は北島県令に宛て、二宮良逸の兄龔造を正覚寺門第三分院の設立に当って試験的に治療させたところ、至極治療係相当の人と認められたので臨時採用して貰いたいと伺を呈出した。これは警視被傷者六十余名が戦地より輸送され、本院並びに兩分院とも満

員となつたために第三分院が設立されたもので、同時に区費生のうち、宮川元積を看護長助勤に、伊東成治を薬剤係に選挙し、手当として五円を支給した。この発令は十三日である。

長崎病院雇医となつた二宮龔造は月給二十五円を支給されたが、その履歴書には

福岡県管下筑後国第拾二大区巷小区

竹野郡石垣村百八拾三番屋敷

平民 二宮 龔造

当丑六月迄三十七才九ヶ月

安政五年戊午正月長崎洋医流郡元之進江従学三年ニメ去リ文久辛酉三月大阪洋医流兒玉純造江従学翌年六月帰省メ文久三年癸亥正月開業明治三年二月長崎医学学校入門同年六月退帰開業明治七年十二月三瀧県病院修学局長被命明治九年廃県迄相勤罷在候也

と云つてある。ポンペの孫弟子に当る訳である。

六月十二日に至り、長崎病院医局は第一・第二・第三分派病院に対し、征討軍団病院課の要請により、当時の在員傷者数を調査するよう依頼している。この種の調査はしばしば行われていたが、後に七月の分をまとめて掲

第五節 西南の役と長崎病院

げよう。さて、この調査を要請した征討軍団病院係は先に久留米にあった緒方惟準を長とするもので、この時、惟準は長崎に出張して来ていたのである。又、この頃、第四分派病院がバラックで建てられた。

六月十九日、吉田健康は北島県令宛てに区費生小佐々立栄が臨時薬局掛であったが、脚気のため転地するので、解雇し、代りに区費生友清幹吉を採用するよう伺書を呈出、六月二十日に発令された。発令された書類によると、第一分派長崎病院の薬局係で、手当は五円である。

六月二十四日、吉田健康は患者用蒲団、寝床、蚊帳、ケット、病衣等のうち不用の分を通知するよう各分院庶務掛に達した。そして一・二日中に五・六十人の患者が来ると予告した。

さて、六月二十九日、長崎県は国富僊太郎の長崎医学場長代理を免じ、吉田健康を長崎病院雇に任じ、長崎医学場長を兼務させた。この六月中に佐野常民が長崎に来て、緒方惟準と協議し、博愛社と称する一社を作り、赤十字社の趣旨に倣って、戦地の傷病者を官軍たりとも、

賊軍たりとも、その属するところを問わず、救療しようと申出た。緒方惟準はこれに大いに賛成し、長崎市中の軍団病院に二分室を設け、これを賊軍傷病者に分与することとし、ここにその傷病者を施療したのである。これがわが国の赤十字社の基本をなすものであった。実に、長崎において今日の赤十字社の精神を体した博愛社の最初の病院が作られたのである。

七月九日、有栖川宮熾仁親王が警視病院（長崎病院は主として警視員を收容していた。）に來臨された。

有栖川宮様警視病院へ本日御巡視可相成候ニ付過刻御示談相遂ケ置候処本日之儀者本院文ケニテ分派病院之儀者御延引相成候条此段為御心得御通知および候也

十年七月九日

衛生掛（衛生）

第一分派病院医局

庶務掛 御中

追テ各分派病院へ本文之儀通知可然取計有之度候也

有栖川宮は各分派病院にも來臨されたのであろう。

七月九日、吉田健康は北島県令に宛て、第四分院設置

に当り、長崎病院雇医として月給三拾円で臨時に鹿児島自然を採用されるよう伺を呈出した。役目は治療係である。鹿児島自然の履歴書を示そう。

県下第一大区三小区本紺屋町

六百八拾七番地寄留鹿児島寿安同居

鹿児島自然

二十六年十一月

一 文久三年癸亥四月ヨリ慶応三年丁卯九月迄福岡県河野禎造ニ従ヒ四年六ヶ月間洋法修学

一 明治三年庚午九月ヨリ県下寄留鹿児島寿安ニ従ヒ同四年辛未二月迄修行

一 同四年二月ヨリ同七年四月迄旧第五学区医学校エ入塾和蘭教師ニ従ヒ諸課受業

一 同七年四月鉱山寮御雇被 仰付県下高島ニ出張同十二月炭坑舎エ御引譲ニ相成該舎ノ依頼ニ応ジ其儘高島ニ罷在候

右之通ニ相違無御座候

明治十年七月八日

長崎県令 北島秀朝殿

鹿児島自然

次に七月十三日に至り、長崎の本院及び各分派病院は入院患者を警視局に引継ぐこととなり、三月二十五日以

来の負傷者入退院数を調査し、一覽表を作製していたので、これを八月十二日に至って、非常事務係、衛生係が纏めた。

明治十年三月廿五日以降七月十三日警視局へ引継ぎ負傷患者入退院別紙一覽表相副供御電囑候也

明治十年三月廿五日ヨリ同七月十三日迄

警視局負傷患者入退院表

名 称	入 院	平癒ニ付退 院	死 亡	七月十三日引継人員
長崎病院	二百二十名	百五十一名	十八名	五十一名
第一分派	二百五十一名	百五十七名	八名	八十六名
長崎病院	八十一名	四十八名	二名	三十一名
第二分派	八十三名	三十四名	一名	四十八名
長崎病院	四十四名			四十四名
第四分派	六百七十九名	三百九十名	二十九名	二百六十名
合 計				

右之通

なお、各病院の明細簿は省略する。

七月十六日、塩山十等属が北島県令に呈出した伺書に

第五節 西南の役と長崎病院

よると、八代軍団病院より長崎病院治療係兼助教引問泰介、同兼薬剤係長屋恭平、同薬剤係阿部権、同山川饒等（他に嶋原三浦清人、武雄清水由順、萬屋町医野間報策、西山渡辺内寄留赤星静民）を解雇する通知が来たので、長崎県では出張陸軍御用雇を免ずる辭令を出した。

これより先、七月五日に、内務省五等出仕前田献吉は長崎県令北島秀朝に対し、戊第十四号を以て、長崎病院附屬の建家を司薬場に引請けているについては、建家のうち、旧講堂内において、病院生徒の教場一間を日々講習時間に貸渡すべき旨を打合せて置いたが、司薬場の整備によりそれが不可能となったので九十坪を借用して講習所を新築したい旨を申出した。これを九日に受け取った衛生掛では第二課と協議して二十一日に回答を發した。

戊第拾四号

御県御病院附屬之建家司薬場江御引請致シ居候ニ就てハ右建家之内旧講堂内ニ於て病院生徒之教場一ト間日々講習時間御貸渡可致旨予而及御打合置候得共今般試験場蒸発所其他天秤器械室等先々模様替取懸リ候処在来之講堂而已ニてハ室内狭小にして適宜之間取出来兼候ニ付於御庁御差問無之候ハ、別

紙図面之場所地坪九拾坪借用講習所老宇新規建築之上最前致来候通将来病院教場江モ御貸渡可致左候得者雙方共万事之都合可宜存候ニ付前条御差支之有無至急御回報有之度此段及御照会候也

明治十年七月五日

内務五等出仕 前田 献吉

長崎県令 北島秀朝殿

追而病院外国病室ト當場試験場トノ間ニ通路有之候てハ自然彼我混淆シテ将来不都合ヲ生シ候儀モ難計ニ付御差支無之候ハ、別紙図面之通転移相成度尤該費用之儀ハ於當場先々相弁可申候条是亦御差支之有無及御問合候也

その回答は七月二十一日に「長崎病院附屬建家ノ義ニ付内務五等出仕へ回答之件」として取扱ひ、前田献吉の申出を承諾する旨を伝えている。その回答の全文を「明治十年^自八月^至十一月^自学務課教育掛事務簿、教育ノ部、第三完」によって示そう。

衛生掛

第二課

長崎病院附屬建家之儀最前司薬場へ御引渡相成候際生徒教場トシテ旧講堂之内一間借受之儀御約定相整居候処今般該場ニ於テ手狭ニ付講習所新築之旨ヲ以病院構内地面九拾坪借用云

々ニ付地図相添内務五等出仕前田獻吉ヨリ別紙之通照會書到來候ニ付精考仕候処右地所之儀は元來遊歩園ニシテ樹木等植付有之迄ニテ先以不用ニ屬スル明キ地故御貸渡相成候トモ將來差支ノ場所ニは無之併シ空氣流通等之為メニは構内ニ建家稠密スルハ敢テ好マザル儀ニ有之候へ共今是ヲ拒ムトキハ前陳旧講堂之内生徒教場トシテ一間御借受有之候○儀廢止等異論ヲ生ズルモ難測果シテ然ル時ハ目下教場ニ差支ルハ不俟其言尤右御借受等之儀ハ一時ノ姑息法故追テハ新タニ御建築可相成候得共其医学場資金タルヤ昨九年分場費各區未納之分即今迄モ取纏兼候程之事故今急ニ營繕費等ニ充足セズ旁容易ニ御着手相成兼候ニ付先以地所之儀は御貸渡相成候分歟ト愚考仕候且又別紙図面之内本院々洋人病院へ通路ノ中場所換之儀モ前段御貸渡相成候上ハ転移相成候方可然見込ニ御座候就テ地所之儀ハ第二課關係ニ付該課ニ於テ実地調査ヲ可遂候得共先以一応見込上申旁御回答左按可然哉此段奉伺候也

御回答按

当県病院附属之建家先般貴場へ御引渡之際從來講堂之内一間医学生徒講習時間ヲ限借用可致儀予テ御協議相整居候処今般試験場蒸発所其他御模様替ニ付室内狭小ナルヲ以新規講習所老宇御建築被成度依テ該院地面之内九拾坪借用云申御照會之趣委詳承知致シ候然ル処該院建家之儀追々及大破候ニ付修繕候ヨリ寧口再築之儀即今専ラ商議中ニテ他日費金等都合能募

第四章 長崎医学の復興

集ノ上ハ速ニ營繕着手為致候見込ニ有之其節ニ至リ位置或ハ便宜模様替等之為メ自然他ニ譲ルヘキ地所無之シテ多少差支候儀有之候ハ、今般御新設可相成講習所建家相当代価ヲ以其儘当県へ御引渡之儀相叶ヒ間敷哉。且最初御協議済之通講堂内一ト間生徒講習時間借用之儀今般御新設可相成講習所内ニ於テ將來聊カ御支ナク御貸渡之兩件御承諾之上右地所之儀御用立候様致度此段御照會旁及御回答候也

明治十年七月廿一日

長崎県令 北島 秀 朝

内務五等出仕 前田獻吉殿

追テ外国人病室へノ通路移転之儀ハ本文兩件御異存無之候時ハ別ニ差支無之候尤実地御着手之節は係官員出張御引渡方為取斗候此段申添候也

七月二十二日、戦時仮病院及び第一乃至第四分派病院の全部が警視病院と改称されたが、吉田健康は北島県令に宛て、伺を呈出した。先頃より臨時護長并に薬局係助勤へ雇入になっていた大曲武八郎以下、十二名の者は去る七月十二日、警視被傷者御引渡の際、御解雇になったが、山口警部よりの依頼により、二十日頃までの約定で警視病院へお貸渡しになっている。同院も用済みになっ

第五節 西南の役と長崎病院

たので、別紙の通り掛合になり、悉く帰場した。それで、全く御解雇になるべきものと存じているので、左に御辭令を添えるといっている。

大曲武八郎（護長助勤）、佐藤一郎、末岡小金吾、岸川万太郎、檜崎元一（以上、薬局係助勤）、戸次清二、赤木末四郎、山口要策、加瀬道益、坂本玄泰、宮川元碩、岩野全治、市川蘭齋（以上、護長）

以上が二十日までの約定で警視病院に勤務していた者である。但し、大曲武八郎は別働第三旅団病院係山口中警部の七月十六日附、吉田健康宛書類によると、十六日に脚氣により看護長助勤を免ぜられている。

又、佐藤一郎、末岡小金吾、岸川万太郎、檜崎元一等は十九日に解雇されていて、それは、同日附、別働第三旅団病院課より廻達された長崎県病院宛書類に記されている。戸次以下八名も、同日、長崎病院に差戻された。

さて、八月一日、奉職履歴医の制度が始められたが、このころ、長崎司薬場はエイキマンの監督下に経営されていた。そして長崎病院が西南の役によって種々の非常

事務をとっていたのに対し、何等の軍事的な役割は演じていなかったようであるが、前記のように、長崎病院内にその研究施設を設けようとしていた。

八月八日、戊第貳拾号を以て、先の司薬場の件を再検討している。

司薬場伝習所之儀ハ都合有之同場境内ニ於て建築可致ニ付最前及御打合候病院地所借用之義御取消相成度尤同院生徒講習時間ハ予而御約定之通り現今将来共御貸渡可致候此段御回答旁申進候也

追而伝習開業之儀ハ本文建築落成之上司薬場詰江頭元朴より御通知可致候此段申添候也

明治十年八月七日

内務五等出仕 前田 献吉

長崎県令 北島秀朝殿

長崎司薬場は薬品取締に関して、種々の講習を行っていたのであるが、序でに明治十年（一八七八年）の薬事行政に触れておこう。

一月二十日、売薬規則が布達され、売薬営業税一方につき一ヶ年二円、鑑札料一方につき一枚二十銭、うけ売及び行商鑑札料各一枚二十銭と規定した。二月五日、抱

水クロラルの貯蔵及び精製法が達せられ、十九日、毒薬劇薬取扱規則が公布され、毒薬十九種、劇薬四十六種を定め、その效の峻劇によって直ちに生命を傷害するに足るものを毒薬とし、その效の強烈でなくてもその用量によって危害を生じ易いものを劇薬とした。二月二十五日、太田雄寧の東京医事新誌が創刊されたが、三月二十二日、燐製鼠とり薬が禁ぜられた。三月二十六日、司薬場試験条例の改正をみ、五月二十八日、杏仁水、桃仁水をラウリケルス水に代用することが公認された。六月、各司薬場の製薬学教場が廃止され、試薬師、助手等に余暇があれば、講義する程度とした。七月十一日、司薬場に願出た薬品で、容量不足するものには「容量不足」の四字を捺印して返付する旨を七新聞社に広告し、量目の不正を防止した。

十二月、ゲールツは日本薬局方の蘭文草案を脱稿した。又、この年、名古屋で、オーストリア人ローレンツはポンペの講義以後、はじめて、法医学を講じ、後年、東京浅草の警視病院におけるデーニッツの講義によって、法

医学が開講されたのに先鞭をつけているが、明治十五年以後、東京大学で別科生に開講以後、裁判医学と称した。なお、九月十三日、新撰旅団司令官小松宮彰仁親王は、博愛社運動に懇篤な好意を寄せられ、自ら総長に就任、種々配慮されるところがあつた。その後、博愛社からは、社員総代松平乗承も戦地に赴き、次いで戦地派出委員桜井忠興も医員及び看護人等を率いて長崎に出張した。ここにおいて、この一団は軍団軍医部の指揮のもとに長崎の軍団病院第十一副舎を負担し、活躍した。それから更に一団は熊本及び鹿児島各地に赴いたのであるが、西南の役終結後の十月十六日、長崎軍団病院が廃止され、臨時長崎病院が置かれて残務処理を行った。こうして博愛社と共に活躍した長崎病院から博愛社の一団が完全に引き揚げたのは十月三十一日であつた。